

3D でみる

奥絵師 狩野家墓所

池上本門寺
東京都指定史跡



3D 画像の見方

1. リンク URL 先への移動（インターネット接続が必要）
 [スマホ・タブレットの場合] アプリやカメラで QR コードを読み込む。
 [パソコンの場合] PDF ファイルを開き、QR コード上をクリックする。
2. 3D 画像共有サイト（Google Poly）に移り、画像が読み込まれる。
3. 様々な角度や大きさと画像をご覧ください。
 画面右上の アイコン→ヘルプ、から操作方法が確認できます。

※ご注意ください※

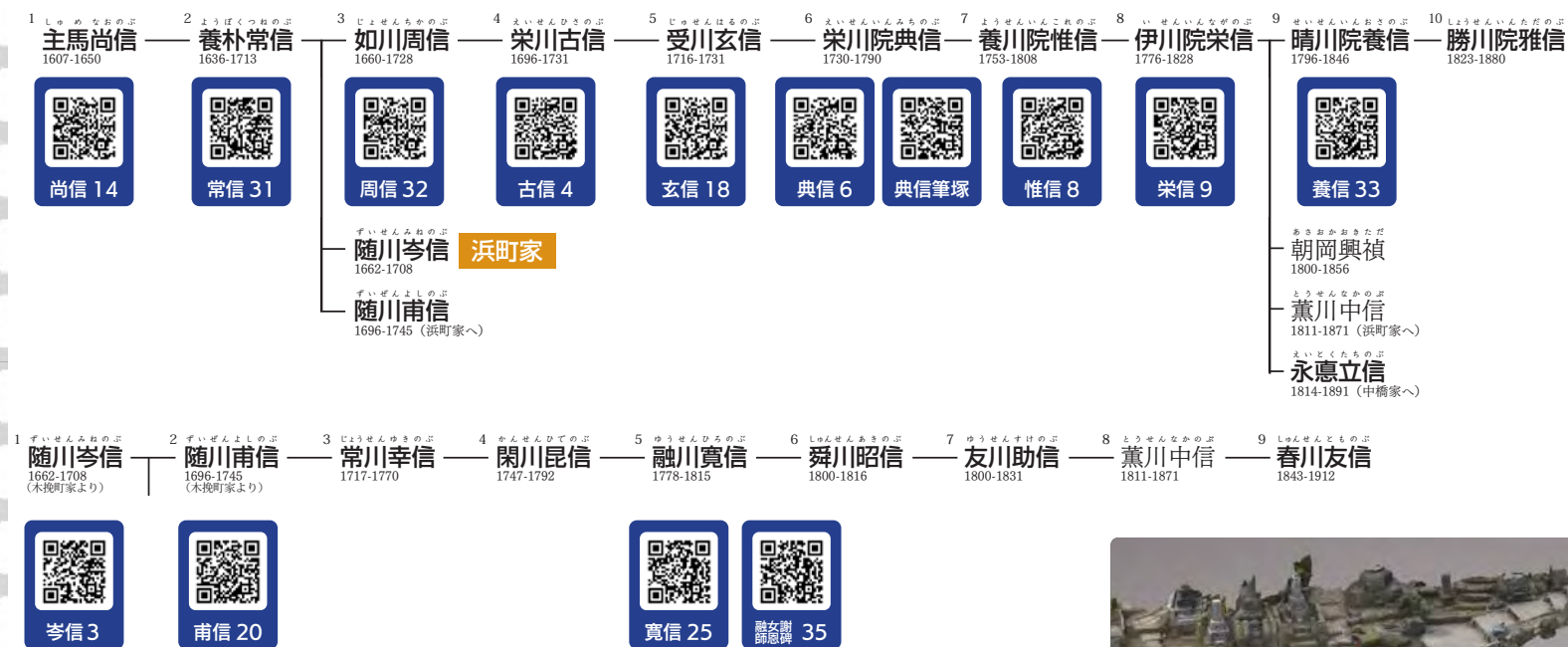
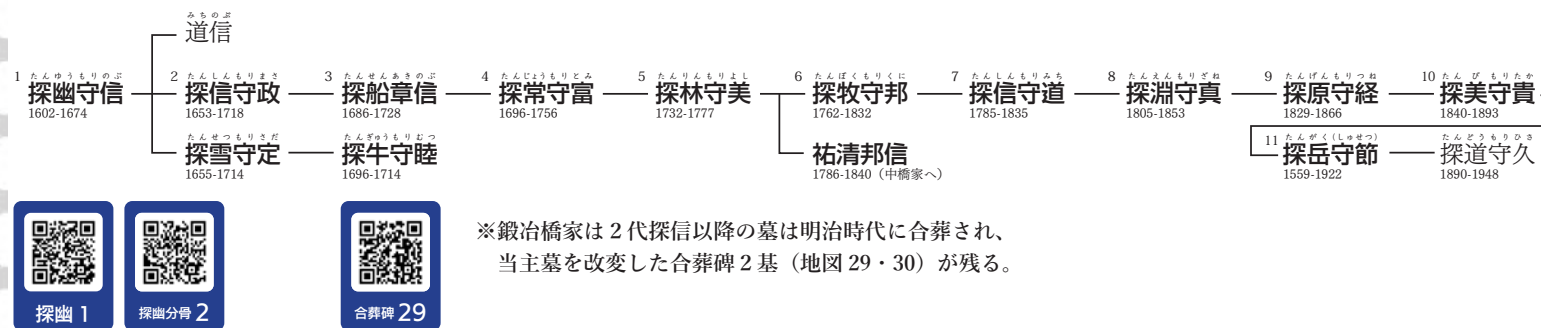
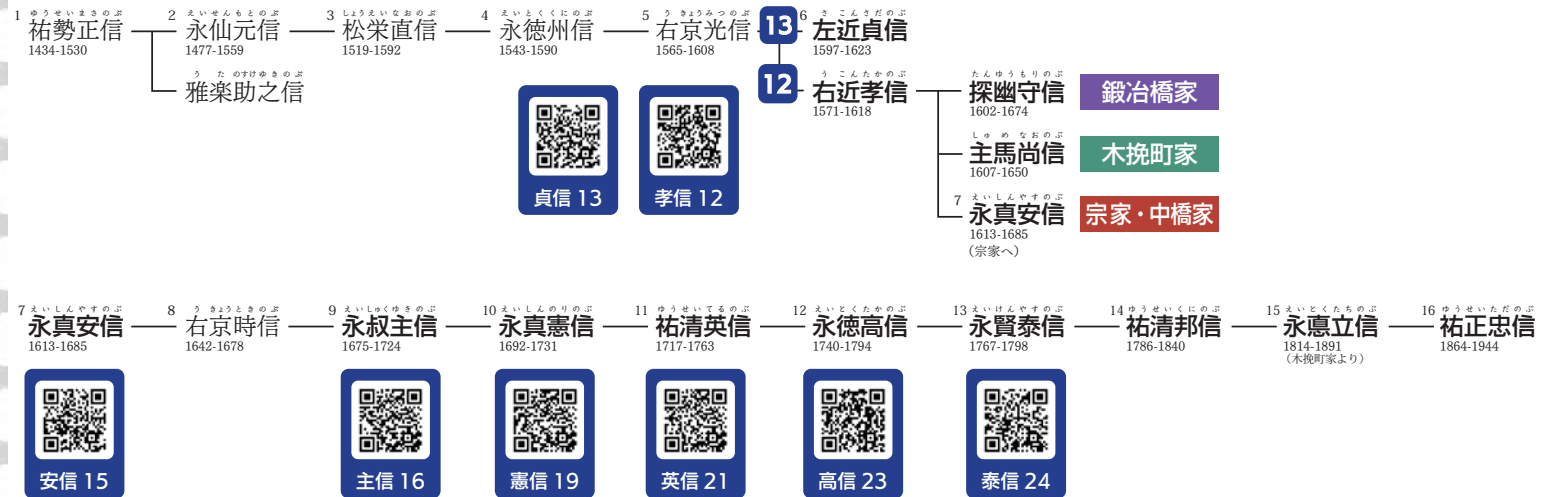
1 画像あたり 10MB ほどのデータ量があります。
 必要に応じて Wi-Fi 接続環境等で閲覧ください。

- ・3D データの数や解説は今後も随時更新します。
- ・3D データおよび本紙の作成は学芸員の本間が担当しました。



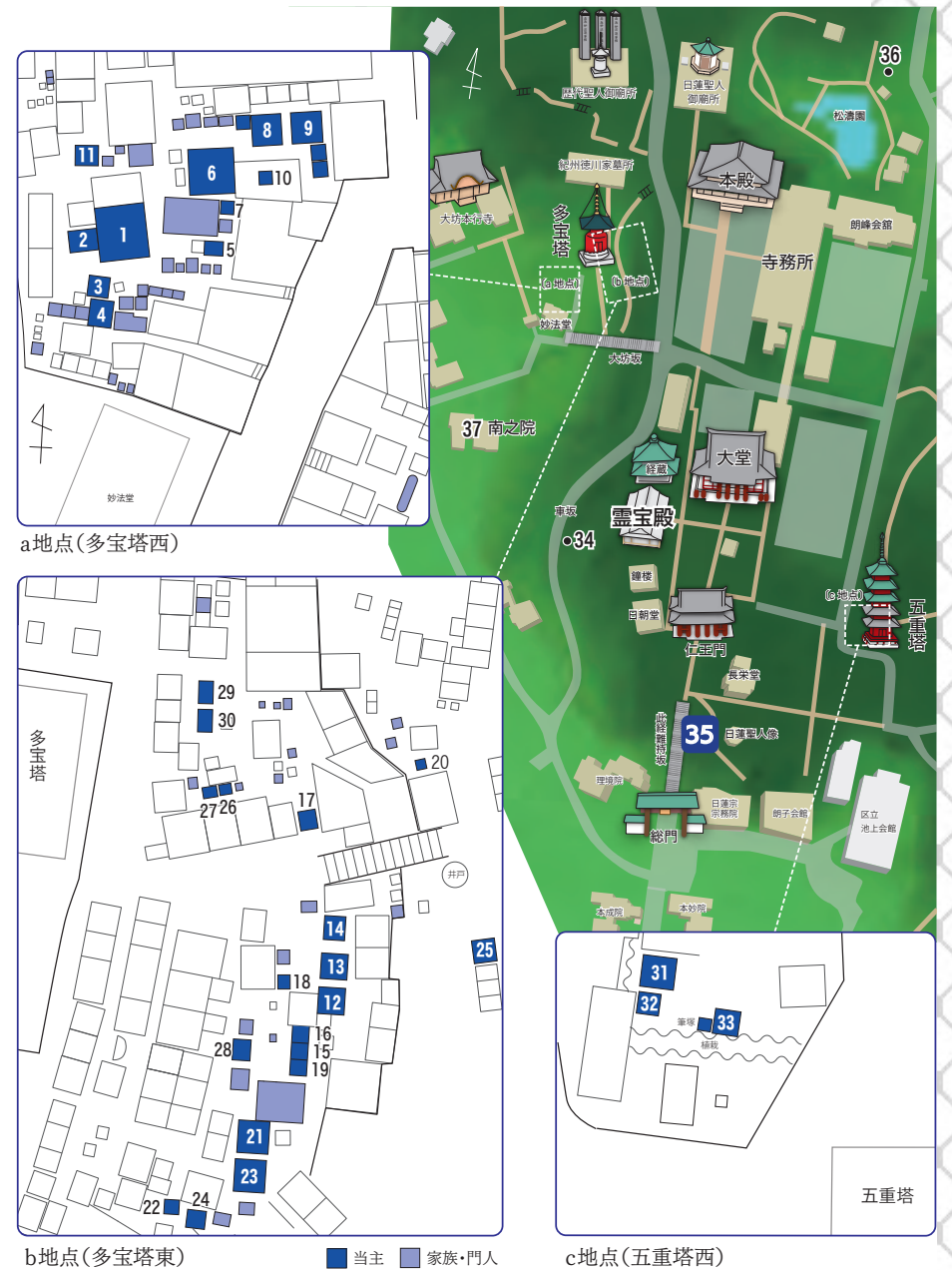
浜町家

池 上本門寺は絵師狩野家の菩提寺です。境内には狩野探幽^{たんゆう}をはじめ江戸幕府御用絵師として活躍した奥絵師^{おくえし}4家の当主や一族の墓石約90基が所在しており、霊宝殿収蔵の位牌や墓所出土の副葬品も含めて、東京都の文化財（史跡）に指定されています。墓所の形や規模は、奥絵師4家の家系や盛衰を反映して、さまざまなものが見られます。特に6代典信^{みちのぶ}以降に奥絵師筆頭となった木挽町^{こびきやうけ}家では、独特の亀趺碑形墓^{きふひけいぼ}と筆塚^{ふでづか}の造立を踏襲しています。



系図の見方

- ・ゴシック体は本門寺に墓所のある絵師
- ・名前左上の数字は当主の世代
- ・囲み内の数字は、右側の墓所位置図に対応
- ・一部の3D画像は表紙掲載のものと重複



狩 野家のメインの墓域は、日蓮聖人御茶毘所^{おだびしよ}に建つ多宝塔[※]の周辺にあり、探幽や木挽町家の墓群からなる西側（a地点）、貞信・孝信や中橋家他の墓群からなる東側（b地点）に別れています。木挽町家の常信・周信・養信のみ、常信・周信が絵を伝授した徳川吉宗の夫人らの墓所のある五重塔[※]近く（c地点）に離れて位置しています。

※多宝塔、五重塔ともに国指定重要文化財

※多宝塔、五重塔ともに国指定重要文化財

3D
でよむ

探幽墓碑銘

探幽墓碑背面

狩野探幽は、延宝二年（一六七四）に亡くなり、当山に葬られました。その翌年、子息の狩野探信・探雪によつてこの墓碑が建られました。総高三・五mを超える特大の墓碑で、狩野派中興の祖と称される探幽の地位をよく示しています。墓碑背面には、幕府儒者林鷲峰の撰文になる探幽一代記「法印探幽齋」*が刻まれています。この銘文は『古画備考』に収録され、美術史研究上の基礎資料として広く知られています。

（※欠損する「法印探幽齋」の部分は『古画備考』により補うことができます）

3D 画像
より出力



狩野守信碑誌并銘
一頁十月七日法印探幽齋狩野守信病而没于家壽七十三葬於上本門寺明年子那小孫忌其子探信探雪不阿悲慕立碑於
夫名一葉編國無敵者不亦難乎狩野探幽丹青之妙當時獨步同無異語可謂不容易也狩野氏之先出自藤氏而家支流遠江介爲憲其孫維基佐
伊豆國號狩野不傳至茂光宗茂佐鎌倉幕府技藝連綿其求審祐清自豆則後京都儒足利幕府時在儒府源誠政辭職開居東山使祐清監畫國事性癖
好故色遂得其名則髮叙法眼位以給爲業祐清子元信益揚聲價其子祐雪祐雪子祐榮亦敘法眼位祐榮子祐信曰故法眼珍藏其所國松榮生永
德其技立元信進叙法印有二男伯曰光信叔曰孝信乃探幽齋守信父也守信以慶長七年壬寅某月某日產於京都母者佐佐成政娘云二歲時孝信
戲授筆其法忽止屢試之每無皆然見者異之四歲自執筆探幽齋守信父也守信以慶長七年壬寅某月某日產於京都母者佐佐成政娘云二歲時孝信
拜台德公十三歲時畫點於海棠花下殆疑爲永德迨十五歲畫龍於紅葉山神廟雨來日光山三峰山景散山宮廟有經卷則國龍爲例元和幸岡
台德公御覽諸畫工所圖守信筆勢殊協昔爲官物時十六歲既得授筆之譽九年癸亥畫於難波城殿屋自此以降江城改造無不旋費切寬永三年丙
寅行幸二條城其儲御所高壁命守信畫之監司小堀氏爲之題設宣架殿內不明碑於運筆守信乃微其架結構集著技罕頭運足之間縱橫自在假
點假畫而脩飾之不日奏成發曰實非尋常畫者所及也時二十五歲聲名藉甚十三年丙午奉大猷公鈞命圖紫宸殿賢聖障子此是自巨勢金國以來歷朝殊
守信號探幽齋奉賜神影自此以資各行衆繪所號時三十五歲也十九年壬午禁裡造替探幽圖紫宸殿賢聖障子此是自巨勢金國以來歷朝殊
所請選也此後皇居改營二度探幽皆勤之且仙院長信宮亦無不預後素每有朝鮮國信使來貢蒙會國屏風報彼國王之聘信使留館之間屢往
走筆彼畫工見其寫生傳神之逼真無不嘆服其進士請以描已像自珍曰其國亦常見如此之妙教化僧隱元曰中朝亦如斯藝者可稱乎乃知匪啻卓立
我邦其稱於異域亦太矣及今大君幕下治世其墨痕入其覽而蒙感費者數至寬文二年壬寅昇進法印是年亦務省中仙院之繪事時太上法皇
賜宸筆其後明曆上皇亦賜奎翰傳衆至寶行以加鳥四年甲辰季冬始於河內國賜桑地二百石連藝無雙之効於此猶顯矣凡探幽畫幅無貴
無賤競求藏野或掛床壁或爲席珍適於園其價抵金至自幼弱潛心家藝每見古畫不限後唐悉皆摸之經過勝境則爲之少留熟視其氣象認得於心
而去又聞珍禽獸在某所則自往寫之至花草異品亦然故畫品式樣積蓄如丘試假膳古菜名畫則殆與真倅矣常自談曰魯蒙焉遠談山水畫法自此
覺筆力之進其徒有言曰古者畫師各有所長又有所短如探幽則人物山川草木鳥獸等諸品皆無不得意畫鼠則描悉窺蟹則螺飛燕畫鷺則其類集
下至繪大龍照其睛必致雷雨可謂得心手通神之妙也踰踰古希罹病起居不快有痔瘡瘰癧然勉強筆其藝益臻至此聞者皆曰嗚呼昔鍾期去而伯
牙絕絃歟之沒而人琴俱亡今於斯人謂人畫俱亡乎詞既成係之以銘銘曰
傳藝奕葉 立門惟孝 幼齡卓異 工夫覃研 思富物外 意在筆前 無聲以聲 有象而連 圓山之絕 超越鄣屢 萬花之妙 摩倒黃筌
再生僧繇 龍飛上天 坐起韓幹 馬躍揚鞭 市曾深藏 裝績成編 海內獨秀 五十餘年
卯十月七日